第１章　「もの」と「こと」の意味論 ⑤

前おやさと研究所長
井上　昭夫　*Akio Inoue*

天国とは「もの」ではなく「こと」である

イエスの言葉を古代ギリシャ語からケセン語に翻訳した岩手県気仙地方の医師山浦玄嗣は、天国とは国土や場所ではなく、人と人との交わりのなかにあり、「あなたがたの間」を意味し、交わりという実体のある「もの」ではなく、関係・「こと」であるとする。人間関係お互いが幸せな状態である「こと」を「神さまのお取り仕切り」がなっていると解釈するのは、その「お取り仕切り」がギリシャ語でエンギケン（近くに来ている状態）を意味し、時間的接近よりは空間的密着をあらわす表現であるとして、神の国はいつ来るのかと尋ねたファリサイ派の人々に「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」（新共同訳・ルカ福音書 17 章 20121）というイエスの答えを引用し、神の国と天国の考え方を、ケセン語訳の概念理解をとおしてあらたに解説している。

まさに天理教のこの世の極楽観である「陽気ぐらし」も、時間的接近よりも空間的密着をあらわしていると捉えるべきであろうと考えさせられた。とくに印象に残っているのは「信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」という言葉の解釈である。つまり「陽気ぐらし」は、実体のあるからだの状況如何や物質、金銭といった「もの」にあるのではなくて、われわれ人間の間にある「こと」に存在するという意味の解釈である。山浦玄嗣による聖書のケセン語訳には、和辻哲郎の期待する「日本語による哲学」に「エンギケン」的な要素が確たる思想としてうかがわれるのは学ぶところがおおい。

山浦は、2011 年 3 月 11 日金曜日の午後、診療のため山浦医院の通用口を開ける瞬間おそろしい地鳴りが突然響いて来て、あの大地震と津波を経験する。医院の近辺は瓦礫と泥と雪に覆われ、その下に埋もれている数多くの死体や魚は猛烈な腐敗臭に満ち、被災者は避難所を求めて逃げまどい、行くすべを知らない家族を探しさまよっている現場で、診療を続けていた医師であった。もちろんケセン語訳聖書翻訳関係の書類や書籍も泥まみれで使い物にならず、一方患者にうつ病が多発し、自殺願望が増えてきた。高田松原は何万本の松がたった一本を残して全滅し、街は瓦礫の山になったあの土地である。そのような想像を絶する環境のなかで、彼は「そんな中で，気仙衆は勇猛果敢に生きていました。誰一人不平を漏らす人はなく、むしろ陽気でした。みんなで助け合い、励ましあって生き抜きました」と回想する。わたくしは被災者の間にあらわれた「陽気」という言葉が放つ光景につよくこころが惹きつけられたのであった。

一方この項を書いている 2014 年 3 月、「新共同訳」を 1987 年に刊行した日本聖書翻訳研究会から、その機関紙『聖書翻訳研究』を今回の 33 号を終刊として同会は解散し、あらたに翻訳事業を立ち上げ 2017 年の完成を目指しているとの通達があった。終刊号の最終論文は四国学院大学名誉教授の浜島敏氏による「ギュツラフのこだわり『かしこいもの』と『ごくらく』再考」であった。ヨハネによる福音書の「言葉」と「神」の「ハジマリニカシコイモノゴザル。コノカシコイモノ　ゴクラクトモニゴザル」の翻訳で知られる最古の聖書日本語訳・ギュツラフ訳（1837・天保 8 年、シンガポール発刊）の冒頭に出て来る有名な言葉の再評価である。浜島氏は「宣教一五〇年の年月を経て、〈神〉という言葉の中にキリスト教的神の概念を、どこまで日本人に植え付けることができたであろうか、再び問い直す時期が来ているのかもしれない。」と論文を締めくくっている。翻訳研究会の『聖書』改訳再出発には、山浦氏のケセン語訳が影響を及ぼしたと、一会員でもあったわたくしは推測している。

2011 年 3 月 11 日、大津波が東北の太平洋岸を襲い、数万の人が亡くなった。岩手県気仙地方の陸前高田市は市街が壊滅し、大船渡市も市街地の半分が流された。しかし被災地のクリスチャンである医師山浦玄嗣は、被災者を診療しながら、われわれの魂までは津波には流されないと聖書のケセン語訳に没頭する。たとえば氏は、新共同訳のヨハネ 14・6 にある

「イエスは言われた。わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

というイエスの「道」、「真理」、「命」という言葉の意味する「こと」をそれぞれ、

「俺は、人を本当の幸せにみちびく！」

「俺は、人が本当に幸せになるなり方を教える！」

「俺は、人を幸せに活き活き生かす！」

というケセン語に改訳した。しかし、この東日本大震災の惨状を前にして、山浦は足がすくみ体中がふるえて、どうすることもできなかったという。そこで氏に聞こえてきたのは「目をつぶるな！」というイエスの言葉であったと告白する。つづいて次のように述べる。「目をつぶって何が見える？　まっ暗闇だけではないか。そのままでは一歩も動けまい？　一足でも動いたら、何があるかわからない。崖から墜ちるかも知れないし、木にぶつかるかも知れないぞ。その恐怖でお前さんはひと足も進めず、恐ろしさに眼をつぶったまま縮こまっているだけだ。情けないやつだ。いつまでそうしているつもりかね。さあ、目を大きく開け！　どんなに悲惨なありさまが見えようとも、それが現実と言うものだ。目をそらすな。こわがるな。この俺がついているんだ。いいかね、いいことを教えてやろう。わたしの話していたヘブライ語ではな、《ことば》と《できごと》とはどちらもダーヴァアールといってな、互いに区別がないのだよ。お前の身のまわりに起きている《できごと》はすなわち神様の《ことば》なのだ。耳をすまして、その《ことば》を聞け。そうすればこの《できごと》を通じて、神さまがお前に語りかけている《ことば》が聞こえてくるはずだ。お前が今何をすればいいのか、神さまがお前に何をさせようとなさっているのか、それが聞こえてくるはずだ。それに従うのだ。その先に、お前が人間として本当に喜び輝く光の道が見え、お前は幸せに活き活きと生きる！」。

身のまわりに起きている「出来事」（こと）は「神様のことば」なのだという山浦の思案は、天災地変を単なる天譴論とする解釈を超えた悟りと言えよう。「おふでさき」6 号 88 番～ 91 番、114 番～ 117 番にあらわれる神の「残念」の「かやし」が「天火火の雨」「津波」「山ぐえ」「雷」「地震大風」などにあらわれたならば、「胸の掃除がひとり出来るで」という意味のお歌の予言の正しい悟りにかぎりなく近接し共鳴していると感じられる。ちなみに 16 号 15 番に見られる「こと」という字は『おふでさき』においては例外的表現で、通常教祖の原文どおりの漢字の略字表記「事」をひらかなの「ことと」とあらわし、「事」と漢字化されていない。同じ「こと」の非漢字化の例は 1 号 59 番の「あしきのこと」に一例見られるのみである。教祖の漢語草書体の「事」とひらがな「ことと」の書き分けには、何か特別の神意が込められているようにわたくしには思われる。